

## 小学校から中学校までの低学力層の学力の変化とその要因に関する研究（広島大学）概要 （全国学力調査と地方自治体の学力調査を結合したパネルデータを用いた分析）

### 研究の目的

全国学力・学習状況調査と地方自治体独自の学力調査を連結することにより、複数年にわたる児童生徒の学力の変化を把握し、その要因等について分析を行う。

### 分析方法：

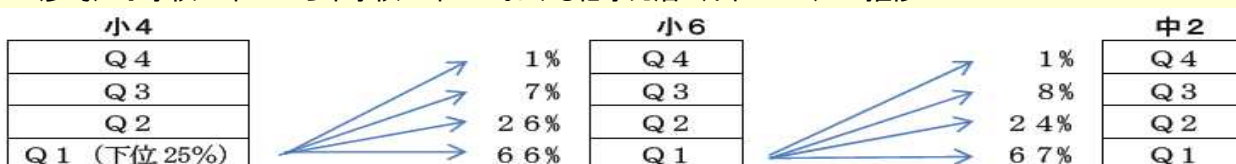
- （1）沖縄県 4 市及び広島県から、独自に実施している学力調査の結果の提供を受け、平成 21 年度全国学力・学習状況調査と、①沖縄県では児童生徒単位で、②広島県では学校単位でデータを結合。
- （2）結合したデータを用いて、①児童生徒における学力層の推移等の規定要因（沖縄県）、②学校における学力水準の変化の要因（広島県）について複数の視点から分析を実施。

### 分析結果

#### ① 小学校から中学校に至る児童生徒の学力の変化・低学力層の学力向上に効果のある取組

- ・ 小学校 4 年生から中学校 2 年生にかけて、下位 25%の学力層のままであった者と、小学校 4 年生時は下位 25%であったが、中学校 2 年生時はそれより上の学力層に上昇した者を分ける要因について小学校 6 年生時の児童生徒質問紙項目で比較分析を行ったところ、国語、算数とともに、「書くこと」に肯定的な回答をした児童は、下位層から上昇している傾向が見られ、「書くこと」に重点を置いた指導が重要であることが示唆された。
- ・ 家庭で宿題や復習をし、勉強時間が多い児童ほど学力が向上しており、家庭での学習の習慣付けが重要であることが分かった。

（参考）小学校 4 年生から中学校 2 年生における低学力層（下位 25%）の推移



※小 4 時に下位 25%（Q 1）の児童の 3 分の 2 は、小 6 でも下位 25%であった。

※小 6 時に下位 25%（Q 1）の児童の 3 分の 2 は、中 2 でも下位 25%であった。

#### ② 中学校学力の規定要因

- ・ 中学校 2 年生時の学力に影響を及ぼす要因について分析したところ、「児童の考えを引き出す指導」は小学校 6 年生時の学力にプラスの影響を及ぼすとともに、中学校 2 年生時の学力に対しても間接的にプラスの影響を与えていることが明らかになった。また、中学校 2 年生時に「数学の宿題を与えること」もその時点の学力にプラスの影響を及ぼしていることが分かった。

#### ③ 低学力層の児童生徒の特徴

- ・ 小学校 6 年生時、中学校 2 年生時の正答率 30%未満の児童生徒に共通する特徴として、基本的な生活習慣が確立されていないことと、保護者との会話が少ないことがあることが分かった。

#### ④ 学校単位での学力向上の要因

- ・ 平成 20 年度から平成 23 年度の 4 年間における学校単位での学力状況について分析したところ、学校の指導方法は、学力向上に大きな影響を与えており、「考える方法を教える指導」、「本を紹介し読み聞かせをした」、「基礎基本調査報告の指導改善事例を活用」などを行っている学校ほど、学力が向上している傾向が見られた。また、児童の学習態度（休日に家で勉強する、夢や目標がある）も、学力向上の一つの要因であることが分かった。